歩き書き 土に聴く

松田解子

松田　解子（まつだ　ときこ）
1905年，秋田県に生まれる．
現在，日本民主主義文学同盟員，日本文芸家協会会員．
主な著書『おりん口伝』（新日本出版社）
『おりん母子伝』（新日本出版社）
『桃割れのタイピスト』（新日本出版社）
『またあらぬ日々に』（新日本出版社）
『回想の森』（新日本出版社）
『地底の人々』（民衆社）
『あなたの中のさくらたち』上・下（新日本出版社）
『山桜のうた』（新日本出版社）
『松田解子全詩集』（未来社）

歩き書き　土に聴く

1987年6月10日　初　版©　　定価　1500円
1987年11月10日　第3刷

著者　松　田　解　子
発行者　山　本　　功

郵便番号 151　東京都渋谷区千駄ケ谷4-25-6
発行所　株式会社　新日本出版社
電話　東京（423）8402（営業）
（423）9323（編集）
振替番号　東京3－13681
印刷　光陽印刷　　製本　小泉製本

落丁・乱丁がありましたらおとりかえいたします。
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布することは，法律で認められた場合を除き，著作者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

ISBN4-406-01517-5 C0095

土に聴く

目　次

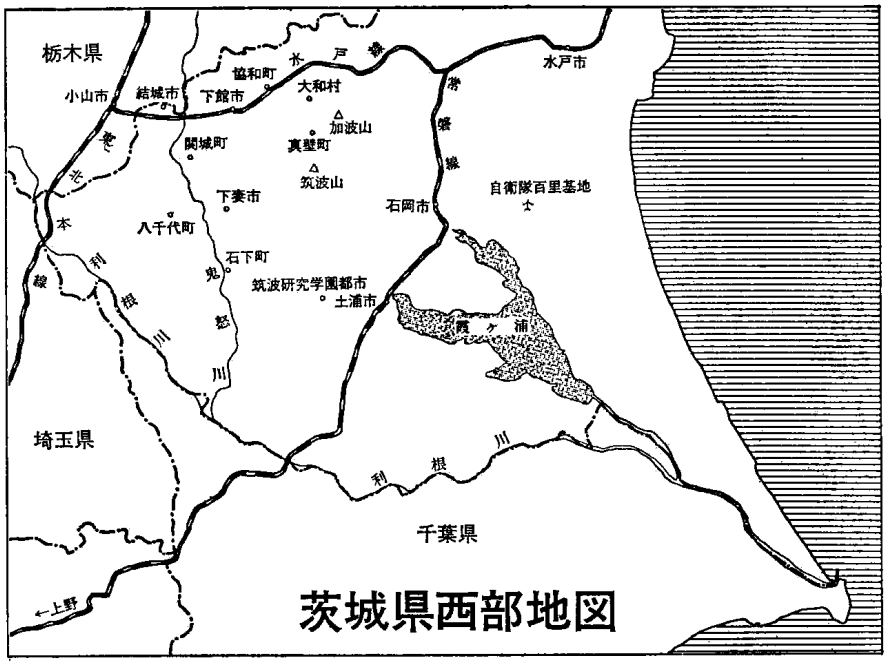
農民という粘土　7
みどりの針の芽　26
コンバインを追って　48
基地と軍靴　62
〝家〟の問題　84
続〝家〟の問題　94
土台はゆれるか　108

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

加波山へ　126
正月歩き　142
宝多き平野　159
おドロさん　176
わが友たち、師たちよ　192
あとがき　215

歩き書き

土に聴く


栃木県
小山市
結城市
下館市
協和町
水戸
大和村
加波山
真壁町
筑波山
関城町
常磐線
水戸市
自衛隊百里基地
下妻市
石岡市
八千代町
石下町
筑波研究学園都市
土浦市
霞ケ浦
利根川
埼玉県
千葉県
←上野

茨城県西部地図

農民という粘土

「すべての人間は農民という粘土でつくられている」

ロシアの作家で、のちに社会主義的リアリズムの始祖といわれたゴーリキイの作中にみえるこの言葉が、わたしは忘れられない。

この言葉をわたしは、ずいぶん若い日に読んだのに、いまだになにかといえば思いだし、

「あ、そうか、……」

と、テレビなどに出る内閣総理大臣とか、最高裁判所の長官とか、何々銀行総裁とか、そのほか世にかくれもない大資本家の代表格ともいうべき人びとの顔などにも、「農民という粘土」の下地を見出しては、「なるほど」と、ひそかにうなずいてきた。

とくにそのことでわたしが忘れられないのは前総理大臣鈴木善幸氏の顔である。あのひとの顔などは、あのひとから、その肩書やら、地味にみえていて高価でもあろう背広やら、その衿についていたバッチの類などをとり去りさえすれば、まさに農漁民そのものの面立であり、またたとえば問題の元総理田中角栄などという人物にしろ、職歴として周知の土建資本家の風貌の奥には、やはり厳然とし

て農民という粘土のいろが、わたしにはうかがえてならない。

ではそういうわたしはどうなのか。それこそ根っからの秋田農女で、あとで鉱山女工になった母親と、祖父以前は農民であったにちがいない鉱山労働者の父の子である。

これはわたしなどだけではなく、その鉱山の大部分の労働者は、元をただせば農民そのものであった。

明治中期から大正、昭和にかけての約半世紀、大資本三菱が支配したその鉱山では、とくにわたしが小学生頃の大正三、四年から六年頃へかけての第一次世界大戦当時など、ピストル持ちの「廻り役」や「飯場親方」を各所に派遣して他社と鉱夫募集を競った。そうして募集されてきた人びとの大部分は、ときの政府の政策ゆえに農では食えなくされていた県下と近県の農民たちであった。

一九〇五年（明治三十八年・日露戦争二年目）その鉱山に生まれたわたしは、そういう農民が鉱夫となってゆく過程を、まじまじと見て育った。その人びとの多くは秋田言葉でなかりとよばれる刺し子の野良着に野良股引（ももひき）、冬はその上にみの、けらなどを着、わらで編んだしんべやごんべ、雪わらじを穿いて、雪道三里をひきたてられ、列をつくって鉱山へはいった。

わたしは満一歳から二歳になろうというときに実父と養父につづけざまに死なれて、三歳ごろからそういう人びとが寝泊りする鉱夫飯場で育ったので、どうしてもそういう人びとをまじまじと見ることになったのであった。

そうして二十一歳の春東京へ出て今日に及んでいるけれど、それでも自分が鉱山時代にみたその人びとの姿が、その人びとの肌のにおいとともに忘れられない。その人びとがすべて自分の兄か父であ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ったように忘れられない。

ところでこれは、つい先頃（一九八四年）七月のことである。

たまたまその日は家の者がみな出払い、東京・中野の手ぜまいわが家にも、珍しく深山のような静けさが生まれていた。

わたしは朝からとりついていた仕事机を離れ、もう正午か、と、ふとテレビをつけてみると、画面はどっと赤鉢巻の農民群像。しかもその鉢巻にはくっきりと、米価・政策要求実現、外米輸入絶対阻止、などの文字が浮いている。

そこは大きな講堂のようなところで、場内のそこ此処に立ったのぼり旗には、北海道、東北から、関東近県……全国各地の農業団体の名がみえる。演壇からは代表がこぶしをにぎってうったえ、場内のあちこちからも手があがり、つぎつぎと立ちあがって、政府買上げ米価がいかに不当に低いか、これまで減反減反と米を作らせないでおいて、こんどは韓国米輸入とは、いかに日本農民の生活と心をふみつけた政府の行為か、……と、うったえている。つづいて農民たちが布旗、ムシロ旗で動き出すらしい情景もちらと写り、さらにそのあと逃げを打つかのようにどこかへ遠ざかってゆく政府代表らしい人物の背広のせなかを、あくまで追ってゆく農民群像。それをまた追ってゆくテレビ局や新聞社のカメラマンたち、アナウンサーの声、……

わたしはその数秒間というもの、自分自身そこにあるかのような思いでこぶしをにぎり、

「そうだ、そのとおり」

「そら、まけるな」
「そら、にがすな」
などと、思わず老いの力み声をあげて、農民の加勢をしていたのだった。
テレビの画面はいち早くわたしの目の前で別のニュースにきりかわっていたけれど、わたしの目から、低米価と減反を怒り、韓国米輸入をいう政府の政策を怒る農民たちの群像が離れなかった。わたしは年寄らしく何度もひとりごとを言って誰もいない家のなかを歩きまわった。
「農民が怒るのはあたりまえなのだ。あたりまえだとも、……」
そして中曽根総理大臣の顔を目にうかべた。
そして、「あの総理大臣は元海軍のエリートだったそうだけれど、あのひとのお父さんは何だったろうか、そのまたお父さんは何だったろう、そのまたお父さんは？　ずうっと、ずうっと、あの総理の先祖は、農民とは全く関係のないひとででもあったのだろうか。いやいや、そういうはずがあるものか、……」と、わたしは逆上り考えながら、現総理中曽根康弘氏と前総理鈴木善幸氏の顔を、あらためて心の額縁におさめて見くらべた。そして結論づけた。「やっぱり、中曽根総理にしろ日本農民の粘土の『地』を、あの顔の底にもっているのだ。あの『地』はけっしてアメリカなどの粘土の『地』じゃない、そうだとも！　だのに、なんだってあのひとは、こういう自国の農民を泣かせる政策ばかりとるのだろう、……」
考えれば考えるほど、それが解せなくなり、なさけなくもなっているとき、電話が鳴ったので出てみると、以前からの知己である『あすの農村』編集部のN氏の声だった。

「テレビ、見られましたか」

「見ました、……韓国米輸入、いくら自民党中曽根内閣でもひどいじゃないですか、ここまでやるとは」

「まったくですよ。じつはそのことについてですが」

N氏はすかさず言葉をつづけて、いま、そういう緊急な問題をかかえて上京中の農民が、ひろく消費者や民主団体、労組などともこの機会に懇談したいといって会合なども開かれようとしているが出られるかどうか。さっそくそういう会合がふたつばかりやられるのだが、と、その日時や場所などもしらせてくれた。

わたしはそのしらせの前に、自分の年齢や慢性の腰椎症のことなども考えて内心ためらった。が、その一方で、こういう際にこそ農民の、ほんとうの声をきかなければ、自分には、またと聞く機会がなくなるのではなかろうか、という不安も湧いた。

N氏からは、いずれ『あすの農村』にも何らかの連載読み物を書いてくれるように依頼されてもいたのだった。それで私はN氏につたえた。

「そうですか。いいことしらせて下さいました。この際ぜひどっちの会合にも出たいので、よろしくおねがいします」

その夜わたしは昼の興奮のせいか、しばらくは寝つかれなかった。寝つかれない頭であれこれと、戦前から戦後への自分の人生と農民とのかかわりを考えた。

なかでもわたしは戦後の一九七〇年（昭和四十五年）一月さなか、地下鉄東西線行徳駅のさきのM製

鋼に、臨時の組夫となって、ほんの、ひと月足らず働いたとき、同じ盤台にならんで仕事をした、千葉農女や、漁民の主婦が思い出されてならなかった。

また、同じM製鋼に、年間、半年近くもきているという青森や秋田からの出稼ぎ農民の顔も目にうかんだ。

その工場は、各種機械用から玩具用までの特殊磁石の輸出部品をつくっていたが、女の組夫はアメリカ行きの玩具用小物をあつかった。

ところが、その女組夫の大部分は、先祖代々米を作り、野菜を作っていた自分らの農場や、海苔漁場などを、まさにその大工業資本の手に売りわたした結果、そこに来ていたのであった。そして太陽と海の匂いのする大気を浴びるかわり、そこではありとあらゆる金粉を吸いながら、玩具用鋳物のバリを落したり、それをパイプ状のケースにつめたりする作業にしたがっていたのだった。それを朝八時から夕四時までやって賃金は男一千百十円、女八百六十円であった。

当時すでに六十五歳にもなっていたわたしが、東京・中野の北はずれの町から、あえて朝の五時起きで支度をしてその工場へ出掛けたのは、戦後ほんとうに世のなかは、あたらしい憲法どおりの世のなかになっているかどうかを、足腰の立つ今のうちに自分の体で知っておきたいと思ったからであった。それを、どこよりも、国民の大多数が生きるために働く工場で、たしかめたかった。

ちょうど、そう願っていた矢先にその工場が、短期間だが組夫を募集しているからと、しらせてくれたひとがあった。わたしはこれさいわいと飛びこんだのだった。

そうして、じっさいに飛びこんで知ったことはいろいろあったけれど、なかでもわたしが痛感した

ことは、米を作る人間（農民）が、政府の農民切りすて政策のために年に六ヵ月も妻子と別れて遠どおと、こういう場所に来て働いているという事実だった。

同時に米を作る農場、海苔を作る漁場が、かくも歴然と万人の目の前で〝大工場〟に早変りをして、本来の農・漁民女性を、（また男性を）大地と海から切り離し、このような金粉と熱気と機械の轟音のなかで、最低条件の賃金労働者にしてしまっているという、その事実だった。

このことひとつをとっても、わたしは、これでもほんとうに、国民主権の憲法が行われているということになるのだろうかと、心底うたがった。まして歴然と、同じ盤台の上で、同じ時間、まったく同じ作業をしながら、男と女の賃金差が、こんなにあってもいいのだろうか。また男同士でも、本工、臨時工、組夫の三段階が、いかにも平然と行われているけれど、これが新しい憲法や労働基準法にてらしても、みとめられて当然の姿だといえるのだろうか。そしてまた、この工場のつくる磁石が、まだベトナム戦争をつづけているアメリカの戦闘機用にでも使われるとしたら、――もし、そうだとしたら、新しい憲法前文の、いちばん大切な項目、主権は国民にあるという項目と、政府の行為によってふたたび戦争はしないというあの項目と、戦争の放棄を、はっきりとうたった第九条はどうなるのだろうか。これでは新しい憲法が、国民の働く場では全く生かされていないといっても差支えないのではなかろうか。とくにあの長期出稼ぎ農民の姿は、どうだろうか。

わたしはそのように、はてしない疑問と憤りをもったのだった。

とくにその工場の昼休みどきなど、半年も妻子と別れている父親組夫が、垢ぐるみの仕事着のまま、古風なダルマストーブのもえる組夫用箱番の木の腰掛にごろりと横になって、あーあ、と、大き

な溜息をついている姿などをみると、わたしはしみじみ自民党政府の農政の酷さを考えさせられた。なんでこういう屈強の五十代農民を、やれ「転作」だ、「減反」だと、農地と妻子から切りはなして、とんなところへ追いこむのだろうと。……すると、そこへ、まさにこの京浜地帯で、農漁場を大資本に買いとられたばかりに、今は組夫女工となった母親たちもやって来て、東北農民の肩などを「つらいべえ」などといって、もみほぐしてくれていたのだった。

それは一九六一年、自立経営農家の育成とか農業の生産性向上とかをうたった農業基本法が出たあと、——田中角栄内閣が、「日本列島改造論」を打ち出して、国の政策として、農家つぶしをやった時代、そしてアメリカが、ベトナムで、敗色をあらわにしようとしていた時代の、京葉の大工場裏の箱番風景であった。

ダルマストーブの金蓋では、やがて目のただれた鰯が、じゅっという音をさせて直かに焼かれた。窓ガラスが二枚ばかり剝がれていて、そこには荒莚が下げられ、厳寒の関東の木枯がもろに吹きこんだ。

吹きこむ木枯と鰯の煙にむせながらもゴロ寝をやめない出稼ぎ農民の姿に、わたしは第一次世界大戦当時の秋田の鉱山の、農民出の鉱夫の姿をまざまざと見る思いだった。「かわってない！」と、わたしは自分に言った。「なるほど憲法の字づらはりっぱに変わった。が、農民がおかれた現実と、労働者のおかれた現実は、その本質は、根本のところで、どう変わっていると、いえるというのか？」

ある日のこと、わたしは昼休みどきの手洗い場で、みるからに秋田農民とおぼしき中年の労働者のよこへ行って自分も手を洗いながら、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com